

ブタは「方位の区別」を極微それ自体にある性質とは考えていないということである。そのため、極微が方位の区別を有すると言っても、極微自体にある無部分性や單一性と矛盾することはないと考えるのである。一方カマラシーラは、常に個々の極微それ自体が方位の区別を有しているか否かを問題としているため、「方位の区別」を、もしも極微が集積するとすれば、極微それ自体になければならない性質と考えていたということが理解出来る。そのために、極微が方位の区別を有するということは、極微が実際にその方位に対応する部分を有することと言い換える可能であると考え、それ故極微は單一なものではないと主張しているのである。

以上のように、カマラシーラとシュバグブタとには、「方位の区別」を、もし極微が集積するとすれば極微それ自体になければならない性質であると考えるか、或いは、極微それ自体の持つ性質でないと考えるかという「方位の区別」に對する考え方の違いがある。そしてカマラシーラとシュバグブタとの主張の対立は、この「方位の区別」に対する考え方の違いに由来するものと言うことが出来よう。

1) カマラシーラ、シャーンタラクシタ、シュバグブタの年代は Frauwallner [1961] に依った。

2) 本稿では TS(P)における極微の單一性批判を大雑把に概観したが、全体の詳細な議論は菅沼 [1985]、神子上 [1997] を参照。

3) TSP 678, 14.

参考文献

TSP: *The Tattvasaṅgraha of Ācārya Śāntarakṣita with the 'Pañjikā' commentary of Ācārya Kamalaśīla Vol. 2, Swāmī Dwārikādās Śāstri*, 1968 (BBS No. 2). Frauwallner [1961]: Frauwallner, E. "Landmarks in The History of Indian Logic," WZKSO 5, 1961. 菅沼 [1985]: 菅沼晃「〔撰眞実論〕外境批判章訳註（二）」『壬生台舜博士頌寿記念 仏教の歴史と思想』大蔵出版, 1985. 神子上 [1997]: 神子上恵生「唯識学派による外界対象の考察（1）——Tattvasaṅgraha と Tattvasaṅgrahapañjikā の第 23 章外界対象の考察』『インド学チベット学研究』2, 1997.

〈キーワード〉 *Tattvasaṅgrahapañjikā*, カマラシーラ, 極微, 方位の区別, 単一性
(早稲田大学大学院)

認識手段と結果との対象の相違 ——クマーリラとダルマキールティ——

片 岡 啓

問題の所在 「唯識のみならず経量部の立場においても自己認識が結果（量果）と考えられる」とする従来の解釈にたいして、筆者は前稿において、ディグナガの PS(V)本文の素直な解釈としては、そのように考える必要が必ずしもないことを論じた。前稿の主張は二つである。ディグナガ自身の説としては、経量部に二説を立てる必要がないこと、および、PS I 9ab を、唯識と経量部₂に共通する立場とみなす必要がないことである。I 9a における「あるいはここで自己認識が結果である」(svasamvittih phalam vātra) の「あるいは」の対比は、経量部と唯識の対立と単純に考えたほうがよいというのが前稿の主張であった。

	認識手段	結果
PS I 8cd, I 9cd	経量部	外界対象認識
PS I 9ab, I 10	唯識	自己認識

ダルマキールティに依拠する従来の解釈によれば、自己認識を結果とする I 9ab は、唯識と経量部₂に共通する立場であり、PS I 9cd は、経量部₂の認識手段設定にたいする但し書きと解釈される。すなわち、唯識の立場では把握主体の形象が認識手段、自己認識が結果とされる (PS I 10) のにたいして、I 9cd で明らかにされるように、経量部₂は同じく自己認識を結果としながらも、認識手段に関しては唯識と異なり〈対象の現れを持つこと〉が認識手段として立てられる、というのである。

	認識手段	結果
PS I 8cd	経量部 ₁	外界対象認識
PS I 9ab	経量部 ₂ ／唯識	自己認識
PS I 9cd	経量部 ₂	
PS I 10	唯識	自己認識

PS I 9 の解釈が複雑すぎるのはこの表からも明らかである。ディグナーガは本来、経量部説として自己認識を結果とする立場を想定しておらず、ダルマキールティに至ってそのような解釈が導入されたというのが筆者の予想である。このような予想を裏付けるものとして、クマーリラによる批判という契機を本稿では考えてみたい。

PS, ŠV, PV の対応 PS と PV の対応については、戸崎 [1979: 35] [1985: 2] に明らかにされている。これに ŠV *pratyakṣa* 章におけるクマーリラのディグナーが批判を重ね合わせてみる。

PS I	ŠV	PV III
8cd	74–78	301–319 (認識手段と結果の非別体説)
9ab	79ab	320–337 (唯識；自証=結果) 338 (経量部 ₂) ¹⁾
		339–340 (唯識) 341–345 (経量部 ₂)
9cd	79cd	346–352 (経量部 ₂)
10	80–83	353–366 (唯識における三項目)

表からも明らかなように、クマーリラの批判には、PS 詩節との密接な対応が見て取れる。

PS I 8cd: *savyāpārapratītavat̄ pramāṇam phalam eva sat* → ŠV 74–78: *viṣayaikatvam icchams tu yah pramāṇam phalam vadet/ sādhyasādhanayor bhedo laukikas tena bādhitah//* …「いっぽう〔認識手段と結果との〕対象が同一であることを望んで、認識手段を結果〔に他ならない〕と言うなら、彼は、世間が認める実現対象・実現手段の区別を否定してしまったことになる。」(以下説明が続く)

PS I 9ab: *svasamvittih phalam vātra tadrūpo hy arthaniścayah* → ŠV 79ab: *svasamvittiphalatvam tu tannīṣedhān na yujyate* 「いっぽう自己認識が結果であることは、それ（自己認識）を〔後から śūnya 章で²⁾〕否定するのでありえない。」

PS I 9cd: *viṣayābhāsataivasya pramāṇam tena miyate* → ŠV 79cd: *pramāṇe viṣayākāre bhin-nārthatvān na mucyate³⁾* 「対象の形象が認識手段であるならば、異なる対象を持つ〔という過失〕から逃れ〔られ〕ない。」

PS I 10: *yadābhāṣam prameyam tat pramāṇaphalate punah/ grāhakākārasamvittyo trayam nātah pṛthak kṛtam//* → ŠV 80–83: *svākāraś ca svasamvittim muktvā nānyah pratiyate/ prāmāṇyaṁ yasya kalpyeta svasamvittiphalam prati//* …「また自己認識という結果にたいする認識手段と〔君が〕想定する〔認識〕それ自身の形象は、自己認識とは別に理解されることがない。」(以下理由説明が続く)

PS I 8cdにおいてディグナーガが（経量部の立場から）「認識手段と結果の非別体説」を唱えたのに対して、ŠV 74–78においてクマーリラはそのような非常識な説を斥ける。PS I 9ab の「結果=自己認識」とする（唯識の）立場にたいしては、続く ŠV 79abにおいて、自己認識そのものが認められないことをもってクマーリ

ラは答える。さらに PS I 9cdにおいてディグナーガが（経量部の立場から）「対象の現れを持つことが認識手段である」としたのにたいして、クマーリラは ŠV 79cdにおいて、その場合、認識手段と結果との対象が異なることになると批判する。さらに PS I 10において（唯識の立場から）把握主体の形象を認識手段とする見解にたいしてクマーリラは、そのようなものが自己認識と別に認められないこと、言い換えれば、認識手段と結果とが同一となってしまうことを指摘する。

ŠV *pratyakṣa* 79 解釈の問題 ディグナーガは経量部に二説を認めていないとする筆者の解釈では以下のように説明できる。「いっぽう外界のものに他ならない対象が認識対象である場合」(PSV 4.8: *yadā tu bāhya evārthaḥ prameyah*) と述べる時、ディグナーガは外界対象認識が結果であることを前提としている。PS(V) ad I 9dにおいてディグナーガが「X や Y という形で白・黒などとして対象の形象が認識内に入り込むと、その同じ X や Y という形で、その対象が認識されるからである」⁴⁾ と述べているのは、外的形像と内的形像とが相似しているので、たとえ内に入った形像しか直接には対象としていなくても、認識結果の対象は外界対象だと主張できるとの考え方からである⁵⁾。認識手段と結果の対象はともに外界対象となりうる。ここで *yathā yathā ... tattadrūpah* として「外的形像=内的形像」とディグナーガが内外の相似を主張しているのは、内外のズレを意識的に埋めようとした発言だと解釈できる。しかしクマーリラから見た場合、〈対象の形象を持つこと〉（あるいは対象の形象）が認識手段なので、認識手段が直接に接するのは外界対象であるとしても、認識結果が直接に扱うのは内的な形像でしかない。したがってディグナーガ自身の主張とは異なり、認識手段と結果とは異なる対象に向かうことになる。認識結果が直接に扱えるのは認識内に「入った」内的な形像である。ディグナーガの無理な主張をクマーリラは否定したことになる。

これに対して、PS I 9ab を唯識・経量部₂ に共通する「結果=自己認識」の立場とし、PS I 9cd を経量部₂ の「認識手段=対象の形象を持つこと」の但し書きだとする従来の解釈の場合はどうであろうか。上で筆者は、PS I 9ab と I 9cd それぞれに、ŠV 79ab と 79cd とが対応すると考えた。すなわち 79ab は唯識批判（特に唯識の自己認識を批判するもの）であり、79cd は経量部批判であると考えた。しかし、従来の解釈は異なる。ŠV 諸注釈の理解にしたがって、ŠV 79ab と 79cd とは一体であり、合わせて経量部₂ を批判していると解釈されてきたのである。

このことは戸崎 [1992: 304] の ŠV 科文からも明らかである⁶⁾。すなわち、ŠV 79 全体を戸崎 [1992] は、「結果=自己認識」とする経量部説を批判するも

のと理解している。これは ŚV 注釈に沿ったものである。Hattori [1968: 106], Taber [2005: 81], 戸崎 [1992: 308], Moriyama [2008: 207] の解釈も同様である⁷⁾。クマーリラが批判するのは、認識手段と結果との対象の相違である。Hattori [1968: 106] は以下のようにポイントを説明する。

If it is held that *pramāṇa* is *viśayākāra* while *phala* is *sva-saṁvitti*, then it would follow that *pramāṇa* and *phala* take different things for their respective objects (*bhinnārtha*): the former would take an **external** thing for its object, whereas the latter would take the **cognition**. (Hattori [1968: 106], 太字強調は筆者)

Hattori [1968: 106], Taber [2005: 81] のいずれも、対象形象を認識手段、自己認識を結果とする場合には、両者の対象にズレが生じてしまうことをクマーリラが批判していると解釈している。認識手段の対象は外的であり、結果の対象は内的となり、ŚV 79ab-cd は併せて経量部₂への批判となる。

認識手段の対象	結果（自己認識）の対象
デイグナーガ クマーリラの批判	外的対象 外的対象
	内的対象 内的対象

しかし、この解釈には明らかに問題がある。認識手段と結果とが同じ対象を扱わなければならないことはデイグナーガ自身重々承知していた。そのデイグナーガが何のためらいもなく認識手段と結果との対象が外と内で異なることを公言したことになる。はなから敵に弱みを見せるような真似を、自説を擁護し他説を批判するに巧みなデイグナーガがしただろうか。筆者のように経量部₁の立場で結果を外界対象認識と解釈する場合には、「外界対象=内的対象」と弁明するデイグナーガの言い訳は理解できる。しかし経量部₂の立場で結果を内的対象認識と解釈する場合、デイグナーガ自身が認識手段と結果との対象に内外のズレがあることを最初から強調していたことになり、その明らかな過失をクマーリラがいとも容易に指摘したということになる。自己認識を結果 (PS I 9a), 〈対象の現われを持つこと〉を認識手段 (PS I 9c) と宣言することは、対象の相違を自ら宣言することに他ならない。クマーリラがいとも簡単に指摘できるほど、デイグナーガは対象の相違に関して無自覚だったのだろうか⁸⁾。

ダルマキールティによる PS の再解釈 この問題は、PS I 9 を経量部₂の立場からと解釈する後代の理解に起因する。筆者の解釈によれば、PS I 9cd は、対象

の現われを持つことを認識手段、外界対象の認識を結果とする本来の経量部説（経量部₁）を説いたものである⁹⁾。むしろ外界対象認識を結果とする説を暗黙の前提としている。ディグナーガは、外界対象という原因に従った形で (hetvanūpam) 認識が生じるのだから、「外的対象=内的対象」ということで満足していたと思われる。これにたいしてクマーリラは、そうすると、認識手段と結果との対象が外的対象と内的対象で異なることになってしまうと批判したのである。ここで初めて、経量部の有形象認識論が抱える本質的な問題が明らかとなる。クマーリラの批判を受けてダルマキールティは、(二つのレベルを設けることで) 認識手段と結果との対象を同じものにするべく努力したと考えられる。

クマーリラの指摘の通り、経量部においても内的対象が対象であり、その意味では自己認識が結果であるといえる。ただしこの立場は、ジネンドラブッディが明言するように¹⁰⁾、勝義的な立場においてである。転義的用法では、自己認識の結果¹¹⁾である外界対象の確定が結果である¹²⁾。

認識手段	結果
転義 対象の現われを持つこと	(自己認識→) 外界対象確定

「対象の確立はそれ（自己認識）を本質とするので、[本当は] 自己認識であっても対象認識だと認められたのである」(PV III 349cd) と述べてダルマキールティは、経量部₂の立てる結果としての自己認識を対象認識と呼びうることを説明する（自己認識=対象認識）。ジネンドラブッディの転義的用法の説明は対象確定と自己認識（=対象認識）の因果関係を敷衍したものである（[自己認識=対象認識] → 対象確定）。これにより、勝義において認識（認識手段=結果）の対象は内的であるが、転義的用法によれば認識手段と結果との対象は外的となり、クマーリラの指摘したズレが解決されることになる。ジネンドラブッディは、PV III 346 を踏まえながら、転義的用法において問題が解決されることを詳しく説明する。

PST 72.6-9：外界対象に対しては認識が〈対象の現われを持つこと〉のみが認識手段となるのであって、〈自らを現われとすること〉ではない。というのも、外界対象にたいして、それ（自らを現れとすること）は、[認識を] 実現する手段たりえないからである。なぜたりえないかというと、他のものを対象としているからである（← PV III 346c : aparārthatvāt¹³⁾）。すなわち、把握主体の形象は、[認識] それ自体を対象とする以上、どうして外界対象を認識する手段であろうか。というのも、他を対象とするものが、それは別のものを認識する手段となるのはおかしいからである。

ダルマキールティは、転義・勝義という用語自体は使わないものの、内容的に

はそれに相当する二つの立場 (348cd-350a, 350bcd) を認め、ジネーンドラブッディと同じく「それゆえ対象の相違もない」(PV III 350a: *tasmād viśayabhedo 'pi na*) と明言する。ダルマキールティにおける二つの立場の導入が、認識手段と結果との対象のズレの解消にあったことは明白である。

結語 以上から次のような歴史的経緯が想定できる。有形象認識論が抱える本来的な内的構造にもかかわらず、ディグナーガは「いっぽう外界のものに他ならない対象が認識対象である場合」(PSV 4.8: *yadā tu bāhya evārthaḥ prameyah*) と述べて外界対象認識を結果と認め、結果である認識の内的対象は外界対象に等しいと考えていた(前掲 PSV 4.13-14)。その問題をクマーリラは指摘した。結果としてダルマキールティは、経量部においても「[外界] 対象それ自体が見られない」(PV III 348b: *arthātmā na drṣyate*) ことを認め、唯識説を転用しながら自己認識が結果であるとし、経量部の第二説として提示した。同時に「本性を考察する場合には」(PV III 350c: *svabhāvacintātām*) として(いわゆる勝義として)自己認識を結果とする立場を安全圏に置いた上で、それとは別に外界対象認識・外界対象確定を結果とする立場を立てることでディグナーガを再解釈し、クマーリラの批判を回避した。

- 1) PV III 338 は「それ(認識)が経験される」(*tasyāś cānubhavaḥ*) というように「自己認識=結果」という内容上、及び、PS I 9b への注釈である 341-345 との役割分担上、PS I 9b ではなく 9a への註釈と看做すべきである。
- 2) クマーリラは *sūnya* 章の定説部で、唯識を念頭に置きながら自己認識理論を否定する。経量部説 (SV *sūnya* 35-39) は前主張の中で唯識論者により排斥済みである。
- 3) ウンベーカ注を付すマド拉斯版による。na mucyate には na yujyate という異読が見られ、Taber [2005: 154] も後者を採用する。しかしスチャリタ注 *aparihāryam eva* は明らかに na mucyate を支持する。
- 4) PSV 4.13-14: *yathā yathā hy arthākāro jñāne sanniviśate (sanniviśate)* 小林 [2008] の訂正; *pratibhāti ed.* *śubh[r]āśubh[r]āditvena, tattadrūpah sa viśayah pramīyate*.
- 5) 自己認識を結果とする場合には *iṣṭa/aniṣṭa* の対立を用い、niścaya という表現により主観的側面を強調していたのに対して、PSV ad I 9cd では *prameya, miyate* という表現を用い、*śubha/āśubha* という対立により客観的側面を強調している。
- 6) 戸崎宏正 [1992]: 「クマーリラ著『シュローカヴァールティカ』第4章(知覚ストラ)和訳(2)」、『成田山仏教研究所紀要』15(仏教文化史論集II), 303-317。
- 7) NRĀ と SVK に従う戸崎 [1992: 308] の SV 79 和訳は以下の通り。「自己認識が結果であることは、それ(=自己認識)(の存在)が否定されるから、ありえない。対象形相が認識手段である場合、(自己認識と認識手段とは)対象を異にすることになるから、(汝にとって対象形相が認識手段であることは)ありえない(はずである)。」
- 8) 認識手段と結果との対象のズレを問題にして他学派(例えばニヤーヤ学派)を批判

したのはディグナーガ自身である。PSV 9.4-5 (ad I 19): *na hy anyaviśayasya pramāṇasyānyatra phalam yuktam*. 「なぜならば認識手段が X を対象とするのに、その結果が [X とは] 別の Y を [対象とするのは] 理に合わないからである。」

9) 興味深いことに、バーヴィヴェーカが MHK V 20-26 で批判する説は *viśayābhāsatā* を認識手段として立てる説であるが、自己認識を結果として立てるとは明言されていない(cf. 斎藤 [2008], Moriyama [2008]).

10) PST 73.9-10(← PV III 350bcd): *katham tarhi svasaṁvittih phalam uktam, paramārthatas tādātmyāt svasaṁvittih phalam uktam*. 「【問】ではどうして自己認識が結果だと述べたのか。」

【答】勝義的にはそれ(自己認識)を本質とするので自己認識が結果だと述べたのだ。」

11) PST 73.5-6: *sā hi svasaṁpyit, arthasaṁvido yat kāryam arthaniścayah, tat karoti*. 「なぜならばその自己認識は、対象認識の結果である対象確定を作り出すからである。」

12) PST 72.11: *jñānasya jñeyākāravaśena bāhyo 'rtho niścīyata ity arthah*. 「認識にとり、認識対象の形象によって、外界対象が確定される、という意味である。」

13) 戸崎 [1985: 31] は「なぜならば、他(=外境)を対象としないから」と訳すが、彼自身が注 110 で挙げる諸註釈(例えは PVV: *ātmaviśayatvāt*)からも、また通常の語釈からも「他を対象とするから」のほうが自然である。ジネーンドラブッディの説明も筆者の解釈を支持する。

* 略号と参照文献は前稿に依拠する。以下は本稿での追加。NRĀ: *Nyāyaratnākara*, MHK: *Madhyamakahṛdayakārikā*, SV: *Ślokavārttika*(テクストは Taber [2005] 所収), SVK: *Ślokavārttikakāśikā*, John Taber [2005]: *A Hindu Critique of Buddhist Epistemology*, London/New York: RoutledgeCurzon. 片岡啓 [2009]: 「『集量論』I 9 解釈の問題点 ディグナーガとジネーンドラブッディ」『印仏研』58-1, 106-112. 斎藤明 [2008]: 「バーヴィヴェーカの識二分説批判」『印仏研』56-2, 134-140. Shinya Moriyama [2008]: "Sense data and ākāra," Mihir K. Chakraborty et al. (ed.), *Logic, Navya-Nyāya & Applications. Homage to Bimal Krishna Matilal*, London: College Publications. Studies in Logic 15. pp. 205-216.

〈キーワード〉 ディグナーガ, クマーリラ, ダルマキールティ, 自己認識, 量果

(九州大学大学院准教授, 博士(文学))

印度學佛教學研究

第五十九卷第一号

[通卷第122号]

平成 22 年 12 月

日本印度学仏教学会

JOURNAL OF INDIAN AND BUDDHIST STUDIES

(INDOGAKU BUKKYOGAKU KENKYU)

Vol. LIX No.1 December 2010

[122]

Edited by

JAPANESE ASSOCIATION OF
INDIAN AND BUDDHIST STUDIES

(NIHON-INDOGAKU-BUKKYOGAKU-KAI)

2F Hongo Bldg., 3-33-5 Hongo,
Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0033
Japan

Indian and Buddhist Studies Treatise Database Home Page
<http://www.inbuds.net/>